

ような語り方が語られるのであろうか。あるいは受肉や神化に関して、(ライブニッツが最善観によって説明したように) 諸可能性の現実化として説明し^{おぼ}了なければ、どのような現実化の言語がわれわれに語り出されるのであろうか。

(秋山先生へ)

予型論も同様の畏るべき秘義に直面すると思われる。というのも、トラーという巨大なユダヤ教の言語宇宙に対して自らを「新約」としたとき、そこにある仕方でもトラーとの邂逅が成ったともいえる。あるいはトラーの同化やそれとの架橋が成ったともいえる。その同化・架橋の論理がキリストを中心におく予型論なのであろうか。しかもその予型論はギリシア、ローマ文学にまで適用されるとき、そこでは何か文化的な他者征服が起っていないのだろうか。そうでないとすれば、予型論は新約テキストの特異性と時間軸上の予型で解説し切れないキリストの謎を逆に問い返すのではないか。キリストは打ち手のこづちではない。

以上両先生には異質なもの(神と人, 異文化, 異文書)の邂逅をもたらす言語の用法やその機能・身分に関し問いをたてた。

著者コメント—————大森正樹

パラマスが、神学的にか、靈性としてであるか、あるいは体系的にか、非体系的にか、何らかの総合を14世紀に成し遂げたことは、確かであると考えられる。そしてそこに提出された説は、何か目新しいもの、あるいは新奇なものではなく、むしろ古代教会より受け取った思想の線上にあるものだと、一群の研究者がすでに指摘したことは正しいであろう。しかしもしパラマスに独創を見出そうとすれば、それはこれまで歴代の教父や靈的師父たちがその場その場で神認識に関して述べてきたことを、神の「ウーシア」と「エネルゲイア」の区別という仕方でも説明しようとした、まさにそのことにある(たとえこの二語をすでに多くの神学者が様々な意味で用いていたとしても)。

パラマスにとり最重要事は神に至るために祈りを深めることであった。彼が親しんだ祈りは遠くエジプトの砂漠で修行した一連の世捨て人やシナイの荒れ野で孤独のうちに精神を鍛錬した人々の伝えた「イエスの祈り」あるいは「心の祈り」である。こ

それは長年月のうちに一種の技法にまで展開し、祈りの場所の選び方から始まって、坐り方や呼吸法、そして唱えるべき祈りの文句などが徐々に定式化されていった。極度の精神集中の果てにある人は神と出合ったであろう。しかしその祈りでは精神のみが神に向かうのではなく、体を含めた全体としての個人が神へと心を挙げるのである。ここに体をも動員する祈りの態勢をヘシカズムの特質として述べることができよう。この意味では常住坐臥「神＝イエス」に思いを馳せるのが修道者のなすべきことなのであった。それは全身全霊を賭けた、退くことのできぬ、実存的行為なのである。

そしてどうしてこのような祈りを行うのかと言えば、そこには「人間神化」への遥かな憧憬があるからである。だがしかしこの「人間神化」は決して魔術のようなものではない。われわれが何か超能力を手にするわけではない。勿論神の恵みがあれば、異語を語ったり、未来を透視することもできよう。しかし人間が人間という境涯を飛び越えて、全能の「神」に成るわけでは決してない。聖霊の助けのもとで、神との交流が実現するとき、人間神化が成就したと言える。その基本は神が受肉したという信仰上の事実であり、そこから始めて出てくる考え方である。例えば、タボル山上での主の変容の出来事でも、イエスを介して聖霊の恵みが注がれ、それによって、この地上的世界の現実と超自然的世界の裂け目を、僅かの間、限られた弟子は垣間見させてもらったにすぎない。それはあくまで受動的な出来事であって、弟子たちが求めたり、特に何らか努力して特殊な能力を得たわけではない。さらに言えば日常的な聖体祭儀において、主の体を拝領し、それによって神の生命に与ることができれば、それは神化である。自己を無化しえて、神の生命のうちに生きている者はなべて神化されたと言えるであろう。

また「AはAであって、またAではない」という言明は確かにそれだけを捉えれば、この三次元的世界においては、耐えがたいものである。従ってもしこの言明だけが一人歩きをすれば、論理の規則を破る重大な誤りを犯したことになる。しかしこの言明の裏には、三位一体論が控えている。つまり神にあっては、ヒュポスタシスが三という多でありながら、同一のウーシアをもつということ、つまり多と一の同時成立が可能であった。もちろんこの論理(?)はわれわれの世界にそのままでは適用されない。それを現実世界に用いることは安易であると同時に危険ですらある。何でもありの論理を招いてしまいかねないからだ。だからパラマスはそれをどの場面においても使うようには人に強要しない。パラマスは神認識の場において、神に「ウーシア」と「エ

ネルゲイア」を区別し、ウーシアには人間・被造物は与りえないが、エネルギーには与り得ると言う際に、当のエネルギーはウーシアと「分かたれずして、分かたれる」というしかたで、三一論より導出したこの論理を使うのである。それはあくまで神を合理的に解釈し去ろうとする傾向や立場に対して、深く憂慮し、それに異議を唱えるためである。その方途として、問題の論理を敢えて用いるのである。もしそのような表現を拒否するならば、神は観念的なものとなってしまい、人間と生き生きと交流する生ける神ではなくなってしまうであろう。そのことを人一倍恐れたパラマスはかような非論理的に見える言述を吐いたと考えられる。神と人間が出会う場は可能的世界の出来事ではなく、あくまでこの現実的な世界でのそれであり、そこに人間とは異質に見えながら、実は人間存在の根底を支えるものが顕現するのである。人間とこの存在の根源との交流の可能性を表現するもの、それが東方の論理である。

著者コメント 秋山 学

わたくしは西洋古典学出身であり、拙著は古典文献伝承と関わるかぎりにおいての、教父たちの位置づけと再評価の試みである。その過程で、ギリシア教父に特徴的なアポカスタシス論や両意説などの神学的な諸問題にも踏み込むことになったが、今回こういった拙い試みが中世哲学会という場で全体として取り上げられたことに、改めて感謝したい。哲学者の方々からのご質問が、かえって拙著の方向性を明らかにしてくれたように思う。

まずリーゼンフーバー先生のご質問に対して。ビザンツにおいて神学と哲学の相互接触がほとんどなかったことは、特に西方スコラ期の学問競争に比して非創造的に映るが、このことに関してコンスタンティノポリス・アカデミー（大学）の果たした役割を問われた。コンスタンティノポリス・アカデミーをめぐる問題は大きな難問であり、どの研究書の類にも「依然として未解決なままである」と記されている。史料上の新たな知見を語ることは到底不可能なので、学問史に関わる視座からお答えすべく努めたいと思う。

まず「古典古代思想」を哲学のみに限定することは、ビザンツの精神性にはなじまないように思われる。ビザンツではまず、哲学とは「博識」、すなわち人文主義的教

養を意味したと考えられる。この人文主義的精神性は、十字軍期以降西欧との交流が活発になるに従って、まずアリストテレスを、次いでその他種々の古典写本を西欧世界に流出させた結果、西ヨーロッパ世界のルネサンス運動を開花させた。したがって巨視的に見れば、哲学を（コンスタンティノポリス・アカデミーを中心として）人文主義的土壌の基で育てていたビザンツは、「哲学と神学の競争的論争」という西欧的な形での濾過を経ることなく、後のルネサンス文化へと伏流のごとくにその全体性を委ねた、と言えるのではないか。さらに述べるならば——やや飛躍するが——、20世紀後半の神学の主流が「哲学 vs 神学」といった従来の定形的学問構造から出発せず、主として教父たちの精神構造に基づき、聖書の原典研究を機軸として発展してきたことをここで考え合わせたい。すると、ビザンツの学的構造は、その古典・文献学性と教父神学の墨守、典礼様式の遵守等々により、中世スコラ期の神学を遙かに越えて現代神学の基礎的構造を規定しているのではないか。少なくともわたくしにはそのように思われてならない。

次に、宮本先生のご質問は二つの問いに集約できると思われる。まず「予型論的解釈とは先行文化に対する〈文化的征服〉の一種ではないのか」というご指摘に対して、この問いはおそらく究極的に、人類にとって「受肉」とは一体いかなる意味を持つと考えるか、という厳しい質問だと解せよう。受肉を、神から人類に遺わされる愛の証しとし、対象の十全な完成のための契機であると解するか、それとも「征服」と理解するのかについては、各人各様の回答があり得る。いまそれは措き、別の方面からの試みとして、たとえば密教マンダラの伝播と変遷のあり方を考えてみたい。マンダラは、もちろん密教文化において発達展開を遂げたものであるが、そのうちにはヒンドゥー教など先行諸宗教の神々が数多く取り込まれつつそれぞれの座を与えられていることが指摘される。（拙著が意識した）東方的な把握にあっては、対象をすべてあるがままに受容した上で、自らの中に変容させて位置づけるというプロセスが特徴的である。もちろん、拙著で問題としたのは古典文献の写本伝承という、極めて即物的な正確さを要求される次元での「文化伝播」であるが、この次元でも「(古代の) Aが(中世に) Aとして筆写される」という事実の際して、伝え手の介在は「指」(=聖霊)のうちに求められる、という仮説を立てたわけである。

次に「予型論が文化征服でないとなれば、予型論は新約テキストの特異性と時間軸上の予型で解説しきれないキリストの謎を逆に問い返すのではないか」というご指摘

に対しては、もちろん賛成である。その際「キリストの謎」とは、自ら「無化」を果たすと同時に超越的次元に属する存在であることを忘れてはなるまい。ただ「予型論」という用語の印象からは、単なる時間軸に限定された解釈法の一つと理解される嫌いがあるが、拙著では必ずしもそのようには企図せず、空間的側面をも含めた「予型論」を示唆して、(さらに)東方への視座を拓きたいと考えた。たとえばやはり密教における「五輪成身観」などは、言うまでもなくキリスト教的文脈とは異なるけれども、(アレゴリーではなく)「予型論」の一種と考えるべきではないだろうか。そしてこの際、わたくしの言う「予型論」が、すべてをキリストに集約させながらも、同時に「父」たる存在に還元する方向性をも意識したものであることをご理解いただければ幸いである。